

日本における遊牧民絨毯のコレクション形成 —ヨーロッパ、アメリカとの比較から—

鎌田由美子（慶應義塾大学）

イスラーム圏を中心に織られてきた絨毯には、遊牧民によるもの、家内工業によるもの、都市の工房で織られたもの、宮廷工房で織られたものがある。そのなかでも、遊牧民が生み出してきた遊牧民絨毯（欧米で発達した絨毯学で tribal carpet と総称される）ならびに織物と袋物は、2017–2018年にメトロポリタン美術館で企画展(Portable Storage: Tribal Weavings from the Collection of William and Inger Ginsberg)が開催されるなど、欧米では高く評価され、コレクションが形成されてきた。

ヨーロッパでは1870年代より、学術的な研究対象ならびにヨーロッパ製品のデザイン改良の参考資料として遊牧民絨毯を含むオリエント絨毯が博物館などにコレクションされた。その後20世紀前半には、ヨーロッパの貴族や実業家のなかに、同時代の遊牧民絨毯をソファやカーテンに仕立てて、インテリアとして楽しむ人々も出てきた。アメリカでは20世紀に入るとトルクメン絨毯をはじめとする遊牧民絨毯を集める人々が現れた。

他方、日本では生活のなかで絨毯を日常的に使用することがなかった。そのため、遊牧民絨毯のコレクションにも縁遠いように思われるが、実は日本でも一部の人々が遊牧民絨毯を入手していたことが明らかになった。それらが、どのような状況のもとで、いかなる意図のもとに蒐集されたのかについて調査を行い、以下の新知見を得た。

まず、20世紀前半には、細川護立をはじめヨーロッパへ行く機会を得た人々が遊牧民絨毯を持ち帰り、展覧会などを通じて日本に紹介した。彼らの一部は、それらをインテリアとして使用した。その後の日本における遊牧民絨毯のコレクションにおいて特筆すべき点は、民藝とのかかわりである。というのも、20世紀なかばに柳宗悦が遊牧民絨毯や袋物を所有し、日常生活で用いたほか、彼を慕った芹沢鯉介が遊牧民絨毯を蒐集しているからである。柳はその著作で、「美しい品物」を作る背景に存在するのが「自然」と「歴史」であるとし、「自然の理法」を活かした優れた模様を持つものの一例として絨毯を挙げている。すなわち絨毯は、柳の唱える自然や、工芸の理念に合致するものと認識されていた。

柳と絨毯のかかわりには、ウィリアム・モリスとの共通点が見いだされる。モリスもまた自然を重視し、ヴィクトリア・アンド・アルバート美術館がアルダビール絨毯と呼ばれるペルシア絨毯を購入するのに尽力し、生活のなかでオリエント絨毯を使用したほか、自ら工房で絨毯を織った。柳においては、芹沢に倉敷緞通のデザインをさせている。両者ともに理想化された工芸品として絨毯を捉えていた様子が見えてくる。